

大同生命の社会連携活動と加島屋本宅再現模型の制作

吉田 一正

大同生命保険株式会社コーポレートコミュニケーション部

I はじめに

本稿では「企業の社会連携活動」の一事例として、大同生命保険株式会社（以下、大同生命）が2022年の創業120周年事業として行った「加島屋に関する共同研究」、およびその成果報告として大同生命大阪本社で公開している「加島屋本宅再現模型」の制作過程について報告する。

なお、大同生命では「加島屋に関する共同研究」プロジェクトメンバーの専門家による詳細な「加島屋本宅再現模型」報告書を、既に2023年6月に公開しているので参照されたい¹⁾。

II 大同生命について

まず、大同生命について企業の歴史の概略を述べる²⁾。大同生命は1902年7月に、「朝日生命」（現在の朝日生命とは異なる、旧名「真宗生命」）、「護国生命」、「北海生命」の生命保険3社が合併して誕生した。「大同」という社名の由来について、唯一の体系的正史である『大同生命70年史』には「故事成語にある『小異を捨てて大同につく』」から命名したとあるが、大正時代のパンフレットには「『漢書』『莊子』に散見する無限の包容力を意味する『大同』を社名にとり」とされている。いずれにせよ、当時珍しかった3社の合併、特に関西、東京、北海道と本社所在地の異なる3社が合併に至るまでに要したプロセスを窺うことができる社名といえる。

創業以降は後述する大坂の豪商「加島屋」の当主であった廣岡家がオーナーとして経営を掌握し、中堅上位の生保として存在感をみせていた。その後、太平洋戦争を経て廣岡家がオーナーシップをもった株式会社から、契約者を社員とする相互会社へと企業形態を変え、高度経済成長を迎える。高度経済成長期は国民の保険加入率を大幅に上昇させ、それに伴い生命保険会社各社も急激に業績を向上させたが、大同生命は業界の成長速度についていくことができず停滞し、業界順位も国内生保20社中14位から15位と低迷していた。ここにおいて大同生命は、1970年から

保険料が低廉で保障重視の「定期保険」の販売強化を開始。さらに低廉な定期保険を効率的に販売する方策として集団への販売を志向し、1971年に全国法人会総連合（全法連）、納税協会の共済制度を受託し、「経営者大型総合保障制度」を発売。その大ヒットにより「中小企業経営者向け保険」市場に特化する。

その後は中小企業経営者と密接な関係を持つ職業会計士団体である「TKC全国会」や、全国各地の税理士組織と提携し、その団体の特性に合わせた制度商品を設計・受託することで、特化路線をさらに発展させることに成功した。大同生命はこの1970年代に転換したビジネスモデルを現在も継続しており、「企業保障のエキスパート」として契約企業数は全国約37万社、新契約高に占める「中小企業市場」の割合は98%を占めている³⁾。

近年では、1999年の「太陽生命」との全面的な業務提携、2002年の国内生保初となる「相互会社から株式会社への移行」、さらに2004年からは太陽生命、2001年にグループとなった「T & D フィナンシャル生命」とともに、持ち株会社「T & D ホールディングス」を設立し、現在に至る。

2022年に大同生命は創業120周年を迎えた。近年では中小企業を取り巻く環境変化やニーズの多様化が進むなか、大同生命では、中小企業を守るための「保障提供の進化」と、保険領域にとどまらない中小企業が抱える様々な課題の解決支援である「課題解決への伴走」に取り組んでいる。

Ⅲ 加島屋と廣岡浅子

このような大同生命の歴史において、今回の社会連携活動に関して特筆すべきは、合併した3社のうちの「朝日生命」のオーナーであった「廣岡家」と、廣岡家が代々当主を務めた大坂の豪商「加島屋」の存在である。

加島屋は、江戸時代の店名前を「加島屋久右衛門（加久）」といい、代々の当主は「廣岡久右衛門」を襲名した。1625年に大坂・御堂前（現在の本願寺津村別院近辺）に創業したと伝わる。精米業から身を起こしたが、大坂がコメの集散地として発展するに従って蔵屋敷の蔵米を売買する「米仲買」として身代を大きくし、1731年に堂島米市場が幕府によって公認された際には、頭取役である「米方年行司」となっている。加島屋はその後18世紀中期ごろから、米仲買から全国諸藩への融資である「大名貸し」を行う大名貸金融にほぼ特化し、これにより「鴻池」「三井」「住友」などの豪商と並び、日本を代表する豪商へと成長した。

明治維新を迎え1871年に廃藩置県の詔が出されると、加島屋は大名貸し債権の過半が帳消しになるとともに、大名貸しビジネスそのものが消失することとなり、大きな経営危機を迎えた。この危機を克服するために奔走したのが、女性実業家・廣岡浅子（1849-1919）である。浅子は京都の出水三井家（明治以降は小石川三井家）に生まれ、慶應元（1865）年に加島屋五兵衛家当主、廣岡信五郎（1841-1904）と結婚した。浅子は経営危機に瀕した加島屋を立て直すために、義弟に

あたる加島屋久右衛門家九代目当主の廣岡久右衛門正秋（1844-1909）、信五郎とともに経営を担い、石炭、商社、銀行などのビジネスを展開し、加島屋を近代的企業形態へと転換させる主導的役割を果たした。また、廣岡浅子は社会事業にも熱心に取り組んだ。日本で最初の女子高等教育機関である「日本女子大学校」の設立運動では、創立者である成瀬仁蔵（1858-1919）とともに政財界における支援者の拡大や校舎敷地の提供などに尽力し、1904年の開校に大きな役割を果たした。また浅子は、日清日露戦争の戦死者遺族と傷病兵の救護を主旨に1901年に設立された「愛国婦人会」の活動では、チャリティー主体であった愛国婦人会の活動に対して女性の経済的自立を主張して「授産事業」を立ち上げ、愛国婦人会大阪支部内に縫製工場兼教場をつくり、遺族女性をそこに勤務させて女性の経済的自立を促した。大同生命の創業においても浅子は、1898年に加島屋廣岡家が真宗生命の経営権を取得する交渉においてその指揮を執るなど深く関与している⁴⁾。

IV 大同生命本社ビルの歴史の変遷

このような加島屋および廣岡浅子と大同生命との関係を象徴するのが、現在の大同生命大阪本社の所在地である。現在の大阪本社ビル（大阪市西区江戸堀1-2-1）は、江戸時代の加島屋が店を構えた、まさにその場所に建っている。

加島屋がこの地を取得し店を構えた時期は、1693年まで遡ることができる。また谷直樹の報告ではその上限が1679年あるいは1683年まで遡る可能性を指摘している⁵⁾。加島屋の発展に伴って屋敷も大きくなり、1840年には現在の大同生命大阪本社の敷地の半分にあたる大きさまで店を拡張した。この拡張された加島屋本宅は明治維新以降も廣岡家の職住一致の拠点として存在し続け、1881年に廣岡家が設立した加島銀行の本店となっている（写真1）。

大正時代、加島銀行と付近の大川町（大阪市中央区、現在の住友ビル）に本社をおいていた大同生命の発展と店舗の狭小化にともない、加島屋本宅の地に高層ビル建設の計画が持ち上がった。こうして江戸時代からの本宅を取り壊した上に建てられたのが、大同生命ビルディング「大同生命旧肥後橋本社ビル」である（写真2）。高さは当時の条例による規制の上限だった百尺（約31m）で、「大阪ビルヂング（現・ダイビル本館）」、「堂島ビルヂング」とともに大阪を代表する百尺ビル建築として知られた。

このビルを設計した人物が、ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（W. M. Vories）である。ヴォーリズは大同生命ビルの他にも大丸心齋橋店（大阪市）、関西学院（兵庫県西宮市）や神戸女学院キャンパス（同）、山の上ホテル（東京都千代田区）など多くの建物の設計を手掛けた。ヴォーリズは大同生命と密接な関係にあり、旧肥後橋本社ビルをはじめとした全国の大同生命本支社ビルを手掛けた。写真3でヴォーリズの隣に写っているのは、ヴォーリズの妻である一柳満喜子であるが、この一柳満喜子は大同生命の第2代社長の廣岡恵三の妹にあたる。廣岡恵三の妻は廣岡浅子と信五郎の間に生まれた廣岡亀子で、恵三は一柳家から婿養子として廣岡家に入家した。この



写真 1
加島屋本宅（加島
銀行本店）古写真
（大同生命所蔵）



写真 2
大同生命旧肥後橋
本社ビル

ように、ヴォーリズと大同生命創業家である廣岡家が縁戚関係にあったことが、当時の大同生命のビルをヴォーリズが手がけた大きな理由だった。

ヴォーリズが設計した旧肥後橋本社ビルは1925（大正14）年の竣工から1990（平成2）年の解体まで65年間、言い換えると昭和の初めから終わりまで一貫して当地に存在していた。大同生命は旧肥後橋本社ビルを老朽化および耐震構造の問題から取り壊すことを決断し、当時大阪府吹田市江坂に本社を構えていた大同生命の新たな本社として、1993年に高さ88メートルの現在の大阪本社ビルを竣工して移転し、現在に至っている。現在の大阪本社ビルは旧ビルの内外装の一



写真 3
W. M. ヴォーリズと一柳満喜子



写真 4
現在の大同生命
大阪本社ビル

部を用いた「メモリアルホール」をビル2階に設けるなど、内外観ともにヴォーリズが手掛けた旧肥後橋本社ビルのデザインを引き継いでおり、2023年には「生きた建築ミュージアム 大阪セレクション（第2期）」に選定されている（写真4）。

V 「加島屋に関する共同研究」

ここまで大同生命の歴史と、現在の大同生命大阪本社ビルが建つ地の変遷を述べたが、2022年の「加島屋に関する共同研究」は、近年新たに発見された加島屋の資料を基に、幕末頃の加島屋本宅を模型と人形で再現したものである。

近年の加島屋の歴史資料発見の経緯については、すでに高槻（2023）や谷（2023）により述べられているため割愛するが、そのきっかけは、大同生命が所蔵する加島屋、大同生命についての歴史資料群「大同生命文書」を大阪大学に寄託したことに始まる⁶⁾。2012年、大同生命は大阪本社のメモリアルホールで大同生命の源流である加島屋と広岡浅子についての特別展示を開始した。それから10年が経過し、加島屋の資料が次々と発見され、また、2015年にNHKで廣岡浅子をヒロインのモデルとした朝の連続テレビ小説「あさが来た」が放送されたことで、より多くの人々に、加島屋や広岡浅子を知っていただけるようになった。

大同生命が2022年に創業120周年を迎えるにあたり、加島屋の資料をどのように活用、周知

表 1 「加島屋に関する共同研究」プロジェクトチーム

氏名	所属 (2022 年当時)
谷 直 樹	大阪市立大学名誉教授, 大阪くらしの今昔館顧問
岩 間 香	摂南大学名誉教授, 大阪くらしの今昔館特別研究員
高槻 泰郎	神戸大学経済経営研究所准教授
増井 正哉	京都大学・奈良女子大学名誉教授, 大阪くらしの今昔館館長
服部 麻衣	大阪くらしの今昔館学芸員
松本 正己	松本正己建築事務所
大同生命コーポレートコミュニケーション部	

するかについて、2017 年ごろから広報部（当時）と大阪市立「住まいのミュージアム」（大阪くらしの今昔館）との間で、加島屋の本宅を模型で再現しようという構想が生まれた。この構想は、近年発見された加島屋の資料から明らかになった加島屋の「商い」や「くらし」をわかりやすく「可視化」することを目的としたものだった。また、大阪・関西万博が開かれる 2025 年は加島屋が創業したと伝わる 1625 年からちょうど 400 年の節目の年でもあり、この 2025 年に向けて大同生命創業の地である大阪を盛り上げる取り組みの 1 つとして、大阪が江戸時代に「天下（諸国）の台所」と呼ばれ、商いの中心地であった頃の様子を、加島屋の資料を通じて発信することで、創業の地・大阪への感謝の気持ちを表そうとしたものだった。

こうして、創業 120 周年を前年に控えた 2021 年 9 月、大同生命創業 120 周年記念事業として「加島屋に関する共同研究」プロジェクトが立ち上がり、加島屋本宅の再現模型制作のためのプロジェクト・チームが、大阪くらしの今昔館、神戸大学を中心に組織された（表 1）。

これに、模型制作を担当する株式会社ヤマネ（林圭祐）、アルケミィ（坂部勝則・北原須美子）が参加し、全体のコーディネートを大同生命コーポレートコミュニケーション部が担当した。

VI 再現プロセス

プロジェクトでは、まず加島屋本宅模型の建築図面を作成するための情報収集・分析から始まった。屋敷の外観と構造を分析するための基本資料となった加島屋本宅の絵図面「本宅絵図完」（1840 年、大同生命文書、大阪大学寄託）、『二千年袖鑑』（1847 年、大阪くらしの今昔館蔵）、そして明治期の加島屋本宅を写した古写真から、わかる限りの情報を抽出していく作業から始まった。特に明治期の 3 点の古写真からは、撮影した場所から建物までの距離・角度を計算して、それを絵図面と照合することで実際の寸法を計算していった。

同時に周辺情報として、明治時代の地籍地図、および法務局に残された旧公図から、加島屋本宅の区画上の広さを確定させ、さらにこの情報を絵図面から得た建物のサイズと対照させることで、設計図面に落とし込んでいくことで進めた。こうして作成された建築図面は、平面図・立面図・展開図の合計 14 点に及んだ。

屋敷の外観以上に重視したのが、模型により屋敷の内部を再現するための考証だった。加島屋の「あきない」と「くらし」を可視化するというプロジェクトの主旨から、加島屋本宅屋敷を製作するだけでなく、屋敷のどこで、どのようなことが行われていたのかを説明するために、屋敷の数カ所の屋根や壁を取り払って内装を再現し、人形を設置することとした。加島屋にとって重要な空間であるか、資料から説明できるか、などを考慮した結果、「表通り」「見世（店）の間」「表の座敷」「茶室」「台所・裏庭」「奥座敷」を比定し、さらに再現年として設定した「幕末の1866年秋」に相応しい風俗を検討した。屋敷内に再現する人形は、配置、性別、身分、年齢、役割を割り振り、その割り振りに応じた服装、髪形、小物、しぐさなどを細かく設定し、加島屋の資料や、江戸時代後期から幕末にかけての上方の時代風俗の資料や浮世絵等から詳細を決めていった。このようにして、再現模型には52体の人形と、犬、猫、馬、鳥、合わせて58体が作られた。

人や動物だけではなく、内装や道具類についても詳細な検討を加えた。例えば「茶室」では、屋敷の中心に位置し、かつ広い中庭に面していることから、大名貸しをメインビジネスとしていた豪商・加島屋が最重要顧客である武家を饗応した場とし、武家を客として招くに相応しいしつらえを検討した。床の間に飾る掛け軸、使用した茶器などの道具類は、1928年の廣岡家の売立（競売）目録から加島屋が実際に所有していたことが明らかなものの中から、武士を招く茶席にふさわしいものを選び、それを数センチ大の模型に再現した。なおこの検討の過程において、加島屋久右衛門家第八代当主である廣岡正饒が、表千家家元から、家元後継者をはじめわずかの男子高弟にのみ許される「的伝」を受けていたことが判明している。

また台所の考証では、台所に関する情報が残っていなかったことが大きな問題であった。そのため、江戸時代後期の上方の風習として製作された、雛祭りの台所道具の人形飾りを元に、約40名の奉公人と当主家族が暮らす規模の道具を検討した。このように、発見された資料だけでは限界があるため、再現のシーンでは、研究者に専門的な見地から検討してもらい、詳細を決定していった。このように内装から人形の衣装に至るまで、全てに「根拠」をもって再現を進めていった。

建築図面と内部の詳細が決定した後、模型と人形の実際の製作に入った。製作が佳境に入っても、議論は模型工房のなかで続いていた。例えば「柱や梁などの建物の構造を見せるべきか」、または「部屋の中の様子をくまなく見せるべきか」で、取り払う壁や屋根の広さについて議論が進んだ。また、台所があった母屋の窓を炊事の煤で汚すことや、表通りの土佐堀川に面した岸岐（雁木すなわち階段状の河岸）を、潮の満ち引きが分かるように下から数段を汚すなど、よりリアルな表現にするための工夫が、完成に近づくとともに行われた。

こうして、プロジェクト・チームの組成から約10カ月後の2022年7月、「加島屋本宅再現模型」は完成し、大同生命大阪本社のメモリアルホールに運び込まれた。完成した加島屋本宅再現模型は、幅約1メートル、奥行き約3メートル、実際の建物の30分の1の縮尺で作られた。



写真 5
「表の通り」
(加島屋本宅再現
模型)

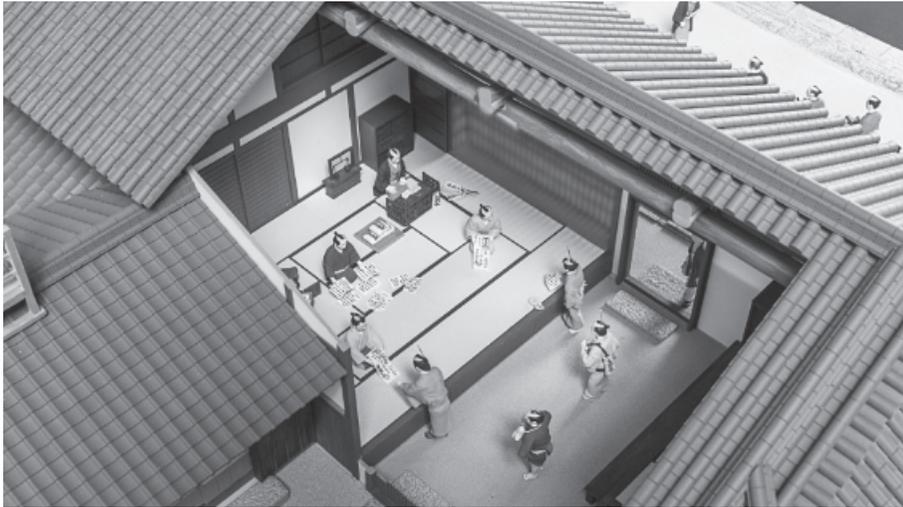


写真 6
「見世(店)の間」
(加島屋本宅再現
模型)

Ⅶ 加島屋本宅再現模型の紹介

ここからは、完成した模型の様子を紹介する。インターネット上では「大同生命バーチャルメモリアルホール」で360度立体画像で模型を閲覧できるので、あわせて参照されたい⁷⁾。

「表の通り」(写真5)は、現在の土佐堀通りにあたる。土佐堀川を挟んで中之島、その先には堂島米市場がある堂島があり、当時の最先端の流通・金融センターとして繁栄していた。それを表すために、武士、町人、女性、子供、荷馬など多くの人やものが行きかう街並みを再現している。また、加島屋の入り口に向かって駕籠越しに立っている若い女性は、模型の設定年代である1866年の前年に、京の出水三井家から廣岡信五郎に嫁いだ廣岡浅子である。

写真 7
「表の座敷」
(加島屋本宅再現
模型)



写真 8
「奥の座敷」
(加島屋本宅再現
模型)



「見世（店）の間」（写真6）は、堂島米市場の主要なプレイヤーである「米仲買」たちが店を訪れる、今でいう「銀行の窓口」である。米仲買たちは所有する米切手を担保に加島屋から資金を借り入れ、堂島米市場でさらに米切手を購入しようとしている。その繰り返して米相場が上昇に転じたら、一気に米切手を売却して大きな利益を得ようと考えているのだ。加島屋は米相場には直接参加することをせず、米仲買相手に資金を融通する「入替両替」という業務を行っており、その業務を再現している。

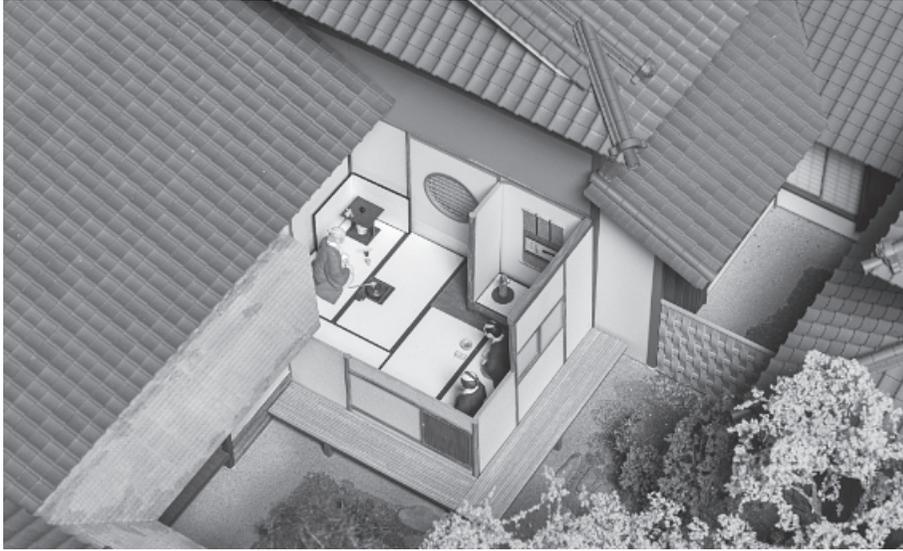


写真 9
「茶室」
(加島屋本宅再現
模型)



写真 10
「台所」
(加島屋本宅再現
模型)

「表の座敷」(写真7)は、加島屋の重要な商いである「大名貸し」の相手、つまり諸藩の役人との打ち合わせの場である。模型では、現在の太田県にあった中津藩を例に、蔵役人に加島屋久右衛門家当主・廣岡正饒と手代が対応している模様を再現した。ここで広げている資料は、大同生命文書に残る中津蔵の管理台帳である「判書帳」といい、大同生命で展示している(2024年1月現在)。加島屋は、このように蔵屋敷の売買状況や中津藩に提出させた財務書類から返済可能額や融資額を高い精度で判断することで、リスクが高いといわれていた大名貸しを、堅実かつ安定的なビジネスへと進化させた。

「奥の座敷」(写真8)は、当主である廣岡正饒と家族の生活空間の一部であり、再現模型では客間としている。正饒の下を訪れているのは、彼の次男である廣岡信五郎と妻の浅子、また正饒

の隣には、後に九代目久右衛門を名乗る、大同生命初代社長でもある廣岡正秋が座っている。加島屋に嫁いだばかりの浅子は、夫である信五郎とともに近くの漢学塾に通っており、その学習成果の報告がてら、本家に立ち寄ったシーンにしている。

第Ⅳ節で考証過程（再現プロセス）を紹介した茶室（写真9）、台所（写真10）についても、完成した画像を載せる。

大同生命創業120周年の創業記念日にあたる2022年7月15日に模型を公開し、同時に、大阪くらしの今昔館では「商都大坂の豪商加島屋 あきない 町家 くらし」と題した企画展が開催された（2022年7月15日～2022年9月26日）。この企画展では、再現プロジェクトで使用した加島屋に関する新発見資料や、プロジェクトを通じて得た新たな発見、さらに模型では表現しきれなかった加島屋に関する様々なものが展示され、また、展示品と加島屋本宅再現模型を収録した図録も制作された。さらに、最新の加島屋研究により専門的な見地から、高槻泰郎編著（2023）『豪商の金融史—廣岡家文書から解き明かす金融イノベーション—』が刊行された。

以上が、「加島屋に関する共同研究」の全体像である。

VIII おわりに

大同生命が本業とする生命保険それ自体が、生活の安定・経済の発展と密接に関わりを持つ、社会公益性を有する事業であるとされている。その公益性は大同生命の創業にも関係しており、創業者の一人である廣岡浅子が保険業への進出を決めた理由について、以下のように「生命保険の持つ社会公益性に着目した」と論じた新聞もある（「現代の女傑廣岡浅子刀自（上）」『保険銀行時報』1919年1月27日号）。

「浅子は社会救済の理想を実現する為に、保険業に着目したのではないだろうか。世の中には種々の事業があるが、社会救済の意味を含み、人民をして生活上の安定を得させる事業が生命保険であることは、誰も否定できないだろう。（中略）（生命保険）事業の根底には、社会の幸福を増進したいという精神が存在し、浅子はこの精神に共鳴したのではないだろうか。」

そのため、大同生命の活動も、社会と連携した活動を数多く展開している。全国障がい者スポーツ大会への協賛（1992年から）、中小企業経営者への景況感インタビューと分析結果を公表する大同生命サーベイ（2015年から毎月実施）、「サステナビリティ推進計画」の策定（2023年）など、様々な社会連携活動を行っているが、近年の大同生命が保険を超えた価値の提供として行っている中小企業向けの健康経営支援や経営課題解決支援の諸施策も、広義には社会連携活動の一環と言える。これからも、大同生命は、廣岡浅子の精神を引き継ぎ、あらゆる社会連携活動に取り組んでいく。

注

- 1) 大同生命保険株式会社『「加島屋本宅模型」の設計と演出—大同生命大阪本社ビルメモリアルホール展示模型の公開—』2023年6月, https://www.daido-life.co.jp/knowledge/kajimaya_report/
- 2) 詳しくは、『大同生命七十年史』大同生命保険相互会社, 1973年, および『大同生命100年の挑戦と創造』大同生命保険株式会社, 2003年, を参照されたい。
- 3) 「2023 大同生命のご案内」<https://www.daido-life.co.jp/company/pdf/leaf.pdf>
- 4) 「“女性の貧困”をなくせ!～広岡浅子のSDGs」(大同生命特設サイト「大同生命の源流」)
<https://kajimaya-asako.daido-life.co.jp/column/46.html>
- 5) 谷直樹(2023)「加島屋の建物の変遷と特徴」大同生命保険株式会社『「加島屋本宅模型」の設計と演出—大同生命大阪本社ビルメモリアルホール展示模型の公開—』。
- 6) 高槻泰郎〔編著〕(2023)『豪商の金融史—廣岡家文書から解き明かす金融イノベーション—』慶應義塾大学出版会, p.5; 谷直樹(2023)「まえがき」大同生命保険株式会社『「加島屋本宅模型」の設計と演出—大同生命大阪本社ビルメモリアルホール展示模型の公開—』p.4。
- 7) 大同生命バーチャルメモリアルホール, <https://kajimaya-asako.daido-life.co.jp/mh2022/>